

JUNTO OHKI IMPACT CREATOR



51 ←————→ 50



手話って、なんて美しい言語だろう

大木 洵 人

大木 洵人

ITを使ってろう者の世界をつなげたい

手話と日本語は異なる言語である

なんて美しい
言語なんだろう

最初に手話をしっかりと見たのは中学校2年生の時。テレビの手話講座を偶然見ました。左手の手のひらに右手の指先をぶつからせて「行き止まり」。わかりやすく直感的、「なんて美しい言語だろう」と思いました。

「手で話す」と書くので、みなさん「手」に集中されますが、手話は「手」の動きが全てではなく、「顔」の動きも大切です。「行った」などの過去形は口で表します。手話通訳士が通訳をする時は、相手の口まわりを見ている、手は周辺の情報として見えています。だから取材の時などに、手話をしている手だけを写真で撮ることがあるのですが、それだと意味が通じなくなっていることもあります。

それから手話は国によって全く違います。ろう学校ができてその地域のろう者が集まることで自然と手話も作られるので、発祥がそれぞれ異なります。イギリスとアメリカは同じ英語なのに、手話ではコミュニケーションがとれません。由来にもその国の文化が反映されていて、「ありがとう」は日本の場合はお相撲さんの手刀、アメリカでは投げキッスから。私は日本の手話通訳士の資格を持っていますが、アメリカとヨーロッパの手話に関しては挨拶ぐらいしかできません。

「日本語」は日本語とは言語的にロジックが違います。空中にオブジェクトを置いていつつなげていくイメージ。「お父さん」とか、「お母さん」とか、相関図みたいなのを空間に作っている。右手で「お父さん」、左手で「お母さん」、そして「喧

大木 洵人
おおきじゅんと

株式会社シュアール 代表取締役／手話通訳士

1987年群馬県生まれ。言語としての手話の美しさに魅かれ、慶應義塾大学環境情報学部在学中に手話サークルを立ち上げ、同年にNHK紅白歌合戦の一青窈さんの手話バックコーラスの制作・指導・出演をする。紅白出演をきっかけに、聴覚障がい者向けの娯楽が少ない事を知り、手話映像制作のボランティアをはじめた。その後、彼らの社会インフラが整備されていない現状（手話で緊急電話が出来ないなど）を目の当たりにし、2008年にシュアールを創業。「聴覚障がい者と聴者が本当の意味で対等な社会を創造する」という理念のもと、テレビ電話を利用した遠隔手話通訳や、手話キーボードを搭載した手話辞典「SLinto」など、ITを駆使した手話サービスを開始する。起業後に東京大学大学院情報学環教育部を修了し、慶應義塾大学SFC研究所員も務めた。2012年、国際的な社会起業家ネットワーク「アショカ」より東アジア初のフェローに選定。同年、米経済誌フォーブスよりForbes 30Under30に選出。

嘩した」と表します。「てにをは」がなく、空中に手で単語を置いてラベリングしていくのです。

このように、日本語と手話は全然違う言語です。なので、手話を母国語（第一言語）とするろう者にとって、外国語のような日本語がどれくらいできるかには差があります。生まれつきなのか、何歳で失聴したのか、難聴なのか、その方の状況によって全然違います。筆談も難しい方、口話も話話もできる方、それぞれです。

手話サークル発足
紅白に出演

高校生の時に英語を学ぶためアメリカに留学しました。言葉が通じなくてつらい思いをたくさんしました。自分が関わったことのない社会やコミュニケーション、言語もわからないまま飛び込んでいくのは大変なことでした。でも、だんだんと英語が話せるようになって、仲間とコミュニケーションがとれるようになった。この経験は素晴らしいものでした。

大学に進学して、また同じよ

うな経験を、今度は社会に関われるような何かがしたいと思っていました。そこで思ったのが「手話」です。中学生の時にテレビで見た「手話」という言語「がず」と僕の心の中になりました。

ところが、大学に手話サークルがなかったで、1年生の10月に同じく手話に興味をもっていった同級生と手話サークルを立ち上げました。すぐに10人ぐらい集まりました。

それから間もなくして、大学の先輩である歌手の「青窈さん」から、人を介してオフアールがありました。内容は、紅白歌合戦で「ハナミズキ」を歌うので手話で共演してほしい、というもので、それで、歌詞を手話にしてみんなで集的に猛練習しました。たまたま3カ月で紅白の舞台にも立ってしまいました。手話サークルは思いもかけず注目される存在になりました。

ろう者は救急車を
呼べない

僕は手話を通じて社会と関わろうような活動がしたかったので

52 ← 53

すが、大学のサークルなのでメンバーは動機も思いもいろいろ次第に意見が合わなくなってきました。それで、純粹に手話を学ぶサークルとは別に、ボランティア団体を立ち上げることにしました。

そこではまず、ろう者向けの娯楽番組を制作して、ネットで配信しました。パソコンで動画が見られるようになった時代で、これで手話のチャンネルを作ろうと思いました。でも当時は携帯では動画が見られないし、自宅わざわざパソコンで動画を見るという人もまだいなくて、なかなか難しいものでした。でも、この番組制作をきっかけにろう者と話す機会が増えて、110番や119番ができないことや、病院に行きたくても手話が通じないという話を聞きました。その時、彼らがかに日常生活で不便を強いられているかをはじめて実感しました。

その後、「SVC」が日本でも一部の人たちの間で広がって、ノートパソコンもビジネスマンを中心に普及し、USBで刺すタイプのモバイルルーターが出はじめました。ノートパソコンと

インターネットがつながる環境があればいい。「これならば、遠隔で手話通訳ができるのでは？」とひらめきました。

僕は元々電気オタクの1丁少年。小学生のころから秋葉原で部品を漁って、ハンダで工作したり、自分のノートパソコンで父の仕事のHPを作成したりしていました。だから、好きな1丁と手話が自然とつながった。こうして大学2年生の11月、手話とITを組み合わせたサービスを提供するシュアールグループを創業しました。

インフラとビジネス

電気も電話もインフラですよね。聞こえない人が電話をできないというのはインフラがないということ。インフラであるからには、「安定と安心できる品質、長期的継続性」であることが絶対条件。来年からサービスが終わります、では困りますよね。

しかし、手話通訳の現状はどうかという、ほぼボランティア。1回の通訳で2時間、交通費込みで5千円ぐらい。苦勞し

て身につけた資格でも、これでは通訳者は食べていけません。お金の出どころは行政でも、民間企業でもどこからでもいい、このサービスをビジネスにして、通訳士を月給制の長期雇用にする必要があります。

大学2年生の11月に「法人設立準備団体」として起業して、手話を教えたり、手話のコンサルティングの仕事をしたりして100万円を貯めて、大学3年生の11月に「株式会社シュアール」として法人化しました。

シュアールのメイン事業「遠隔手話通訳サービス」というのは、最初こそ自分のオリジナルの会社は海外には普通存在している、G7で唯一やっていなかったのが日本なのです。それを知った時、すでに世界でビジネスモデルとして成り立っているのであれば、そんなに心配はいるらないなと少しほっとしました。あとは、日本向けにどうカスタマイズしていくかだけです。

大学3年生でシュアールを法人化

ろう者のための 社会インフラ

開業して10年、現在は大きく分けて、「モバイルサイン（遠隔手話通訳）」と「SLingo（スリントキーボード・スリント手話辞典）」という2つのサービスを主軸に運営しています。「モバイルサイン」は、タブレット端末やパソコン、スマートフォンを利用し、遠隔地からテレビ電話を通じて手話通訳をするサービスです。例えば「対面型通訳」の場合は、JRの駅にタブレット端末が置いてあるので、画面を通じて手話通訳士が、駅員さんとうろ者の間に入って、チケットの購入や変更などのこみ入ったコミュニケーション

ョンを、遠隔で通訳するサービスです。聴覚障がいの方から用件を伺い、代わりに電話をかける「電話リレー型」など、企業や聴覚障がい者の方からの要望に応じてさまざまな種類があります。

一方、「SLingo」とは、ユーザー参加型のオンライン手話辞典です。手話の *Visualize* のようなもので、各国の手話単語の情報が全てそろったデータベースを目指しています。手話キーボードを使って手話の意味を調べることができ、新しい固有名詞や専門用語などの手話単語を自ら登録する、さらにはそれを利用者が評価することもできます。どんどんブラッシュアップされる、世界最大の手話オンライン

54

55

るようになった。手話通訳を必要としている人が存在していることを、社会全体がもっと認知することが重要だと感じています。

1Tで 世界の手話をつなぐ

2012年には米フォーブス誌の「Forbes 30 Under 30」、世界的社会企業ネットワーク「アショカ」のフェローに選出されるなど光栄なこともありましたが、自分の感覚としてはもっと早くインパクトを出したかったし、最初に考えたビジョンを10年かけてまだやっているという感じです。

英語があるので、世界中の人と会話するなら一度英語を扱えばいい。でも、手話には英語のような共通言語がないのでそれができない。その間に決めるのは1Tだと思っています。ろう者が集まり、手話が生まれるのがろう学校です。僕はそれを

SLingoでできればと思っています。そうすれば、SLingoの中で世界中のろう者が集まり、各国の手話のズレを即座に修正し、翻訳して、コミュニケーションをもっとスムーズにすることができそうです。

「手話が生まれるところをおさえる」。これが1Tでできればと思っているのですが、構想が大きくなり過ぎてまだ先は長いです。

それよりも、目下の課題はやはり、手話通訳士の確保ですね。日本ではよくも悪くもボランティアの人が多いので、素晴らしいことでもあり、足かせにもなっている。これは、我々の会社というよりも社会全体の問題。手話通訳士で食べていけるような雇用体制を整える必要があると思います。シュアールでは最低でも20万円から。最低でもです。「ちゃんと仕事になる」と、声を大にしていきたいです。

（取材／2018年10月）

心の支え

シュアールはチーム力で成り立っているので、やはり家族や仲間が支えです。活動を通じて新しい人に出会えることがとにかく楽しいので、いろいろな人に会えるこの環境とそれによるワクワク感が僕にとってのモチベーションの元になっているように思います。

CREATOR'S LION



COMPANY PROFILE

株式会社シュアール / ShuR

「ろう者が夢をあきらめることのない社会を実現する」というミッションを達成するべく、「Tech for the Deaf」をスローガンに掲げ、手話とITを組み合わせたサービスを幅広く展開。テレビ電話を利用した「モバイルサイン」（遠隔手話通訳）や、手話キーボードを搭載した手話辞典「SLinto」の提供など、手話で暮らす人々の暮らしを快適に、豊かにするための活動を行う。

Address 東京都品川区上大崎

4-5-37

山京目黒ビル 309

http://shur.jp